プラトーノフ『土台穴』における動物と人間のあいだ

古川哲

1. はじめに

本論の議論の出発点は次のような一節にある。

> 熊は人間のように鎚でもって金敷のうえの赤熱した帯状の鉄を叩いていた[1]。（299）

これは、ロシアの小説家アンドレイ・プラトーノフ（一八九九―一九五一）による中編小説『土台穴』からの引用である。このなかの「人間のように」という箇所は、この場面での熊と人間のあいだの類似を意味している。そして、ここで両者が似ているということの前提には、そもそも両者が異なっているという認識があると考えられる。そのうえで、引用箇所では両者に共通する何かが想像されているのだ。熊が「人間のように」行動するというとき、そこで暗黙に想定されているのは動物と人間という二つのカテゴリーだと考えられる。この二つのカテゴリーは通常切り離されて考えられている。つまり、動物と人間のあいだには、隔たりがある。それに対して上に引用した個所をみると、通常動物が行うとは予期されていない行為を熊が行っており、動物と人間との隔たりがより狭まっていることがわかる。

プラトーノフの作品世界を特徴づける一つの要素が、このような動物と人間との関係の近さであることは、以前から指摘されていた。たとえば、プラトーノフ作品において、人間の形象が動物的な特徴とともに描き出されることを早い段階で指摘したものとしては吉原深和子の研究がある[2]。しかし、プラトーノフ作品における動物の形象と人間の形象の関連そのものを包括的に検討しようとする試みは少なかった。そのような研究状況のなかで、初期から後期に至る作品群を通じて検討することを試みたギュンテールの論文は注目すべきものだ[3]。ギュンテールは、プラトーノフの作品では動物と人間が互いに置き換え可能であるかのように描き出されると指摘したうえで、そこに二種類の相反する要素を見出している。第一の要素は、動物が変化することによって人間同様の生活を営むようになるというものだ。たとえば初期の作品『たくさんの興味深いものについての話』では、動物も社会主義に参加するだろうと主人公イヴァン・コプチクが語る。この第一の要素について、同時代のロシアの詩人ザボロツキーと、画家フィローノフとの共通性が指摘されている。それに対して第二の要素は、人間が変化することによって動物同様の生活を営むようになるというもの

である。その例として挙げられているのが一九三〇年台半ばに書かれた同時代のドイツを舞台とする『ごみの風』だ。この作品の主人公リフテンベルクはあるときから体中が毛で覆われるようになる。そして、周囲からは人間として識別されることすらなくなる。つまり、人間の社会から排除されるのである。

こうした研究を踏まえると、プラトーノフの作品では、動物の形象と人間のそれとを連続性を持つものとして描かれており、それが作品の際立った特徴となっていることがわかる。言い換えると、プラトーノフの作品における動物と人間というカテゴリーのあいだには、中間的なものがあり得るような、比喩的な意味での空間が存在するといえる。そして本論文は、その空間に関する探究の試みである。

本論文では、一九三〇年に完成し、一九二〇年代末の五カ年計画開始に伴う農業集団化を都市と農村の描写を通して複眼的に描き出した中編小説である『土台穴』を扱う。その理由は第一に、動物と人間のあいだの空間というテーマがこの作品にとってもつ際立った重要性のためである。プラトーノフの作品群において、カテゴリーによって区切られた人間社会という主題が、農業集団化に伴う富農撲滅を正面から扱った『土台穴』ほど本質的な位置を占める作品はない。そのような作品にあって、人間それ自体が相対化される場としての動物と人間のあいだの空間は他の作品にもまして、作品全体の構想に有機的に関連付けられているのである。動物と人間の関係の変化が、人間的な社会への参加あるいはそこからの離脱という結果につながることは、ギュンテールが行った分析においてすでに示されているが、『土台穴』ではそのような相関が、本論文で詳述する馬と放浪者の挿話において劇的に示されている。

ロシア革命をプラトーノフは繰り返し作品で取り上げた。したがって、作品の検討に移る前に、プラトーノフが書いた作品について伝記的事項とともに確認することは有益だと思われる。

プラトーノフが書いた最初の著作は『電化』（一九二一年刊行）だ。この小冊子で彼は、大規模な発電所と送電網の整備によるエネルギー生産と移送の効率化が革命の成就に不可欠であることを主張する。このように、プラトーノフは社会評論の分野でまず頭角を現した。そして、この小冊子が出た一九二一年に鉄道技術専門学校の電気工学科を卒業した後は、ロシア南部の都市ヴォロネジやタンボフで、土壌の改良、そして灌漑事業などに従事した。この時期にプラトーノフは小説を書き始めるが、この時期の代表的な作品は、物質を自在に生み出すための理論を発見した物理学者たちについてのＳＦ小説『エーテルの道』（一九二七年完成）や、ロマノフ朝時代の運河建設とその挫折を描き出した『エピファニーの水門』（一九二七年発表）である。これらの小説には、科学的な探求や、治水工事など、作家の伝記的事項と対応する要素が含まれている。

それに対し、一九二七年にモスクワに移住し、執筆に専念し始めたあと、プラトーノフはより直接的に、現実のロシア革命を扱った作品を書き、著作を世に問うていった。そうした作品には、内戦期の歴史の激動を一人の楽天的な兵士の視点から描く表題作を含む作品集『秘められた人間』（一九二八年刊行）、第一次世界大戦の勃発からロシア革命の初期にかけてのロシアを放浪する登場人物の視点から描かれた長編『チェヴェン

グール』（一九二九年完成）などがある。しかしその成功は、これらと重なる時期に書きつがれ、発表されていった二つの作品が文壇において攻撃の対象となったために断ち切られた。その二つの作品とは、一九二〇年代末のモスクワを革命直後以来ひさしぶりに訪れた男の視点から描かれた風刺的な中編「疑惑を抱いたマカール」（一九二九年発表）、第一次五カ年計画に伴う急激な農業集団化が一段落した後の農村を旅する技師によるという形式をとった『ためになる』（一九三一年発表）である。

発表する場を失ったこの時期に、プラトーノフは『土台穴』（一九三〇年完成）を書いた。一九三四年、プラトーノフはソビエト作家同盟の結成大会に参加し、その一員になる。そして程なく、中央アジアにおけるソビエト政権樹立十周年を記念する作品集のために派遣されトルクメニスタンに赴いた。この旅行での取材に基づいて書かれた作品には、中央アジアの砂漠をさまよう民族に定住地を与え救済しようとする青年を主人公とする中編『ジャン』（一九三〇年完成）がある。しかし、作品を出版する上での困難が和らいだわけではなかった。『ジャン』が刊行されたのは作家の没後（一九五八年）である。例外的に、一九四〇年代前半は従軍作家として、戦争を題材にした小説を書くことによって、プラトーノフは作品を発表できるようになった。一九四二年から一九四五年までの間に、単行本、作品集合わせて六冊の著作を刊行している。戦争のときの負傷、そしてまた戦時中すでに発症していた結核が原因となって、作家は一九五一年、没した。

2. プラトーノフ『土台穴』における馬と放浪者の挿話

このように、ロシア革命の開始からソ連が国家として確立されていくまでの時期に主要な作品を残したプラトーノフにとって革命は、自らの意思で参加する対象でもあり、同時に彼の人生を否応なしに決定していく環境でもあった。『土台穴』では、農業集団化に伴う悲惨な状況と、それに接した登場人物が抱く深い懐疑が描き出される。しかしそのとき注目すべきことは、この作品には、革命に対して一義的な否定は行っていないということだ。そこには、粘り強い吟味の姿勢が見られる。

本論文で検討する箇所を理解するためには、そこで描き出される動物を目撃する登場人物ヴォーシェフの作品内での位置づけを把握しておくことが不可欠である。そのため、この作品の筋書きを確認しておくことが必要となる。

勤め先の工場から解雇されたヴォーシェフは、町をあてもなくさまよっているうち、巨大な共同住宅の建築現場で働くことになった。プルシェフスキーは、工事現場で設計を担当している。技師と打ち合わせをしているのは、基礎工事を担当するチークリンだ。基礎工事の後、粗石を敷くときには、サフローノフがリーダーを務めることになっている。そうした工事が進む一方で、傷病兵のジャーチェフは、工事現場の周辺を回っては、物乞いをして食料などを人々から受け取っていた。コズローフは、ジャーチェフに暴力を振るわれて腹部に負傷し、土台穴での労働から離れてしまう。

秋が近づいて来たころチークリンは、革命以前から彼が恋していたブルジョアの女性が、廃工場でその娘のナースチャとい

るのを見つける。その女性の死をチークリンはみとった。翌朝、チークリンと、孤児になったナースチャが労働者の住居にやってきた。ある日、土台穴の基礎工事の際に掘り出された棺桶を返せと要求するエリセイという男がプルシェフスキーのもとにやってくる。多数の棺桶を紐でつないで、エリセイは自分たちの村に帰っていった。

傷から回復したコズローフが、労働組合地区委員長であるパーシキンの運転する車に乗って土台穴に帰ってきた。労働から離れて年金生活者となった彼は裕福になり、三つ揃いのスーツを着ていた。孤立している貧農を探し出すために、コズローフとサフローノフらが、エリセイたちが住んでいる村に派遣された。

プルシェフスキーはチークリンからの知らせで、サフローノフとコズローフが村で殺害されたことを知る。ヴォーシェフとチークリンが村に向かった。その村は、活動家によってコルホーズとして組織されつつあったが、活動家は村を集団化する作業が遅れていることで苦悩していた。

活動家は急進的な集団化を決意し、富農や中農を筏で川に流した。馬に乗って使者がやってきて活動家に、解任を告げる書類を届けた。活動家は、富農撲滅における行き過ぎを非難されたのである。チークリンは、小作人として酷使されていた熊を救い出して活動家のもとに戻ってきたとき、活動家に対する批判を知る。チークリンは活動家を殴り、活動家は動かなくなる。ナースチャは寒い屋外に長い間いたせいで発熱していた。夜があけるとナースチャは死んでいた。チークリンはナースチャのために墓を掘り始めた。

以上が『土台穴』の筋書きである。前半部分では集合住宅の建設が描かれ、後半では富農撲滅が描かれる。その二つは、一九二〇年代末から推進された五カ年計画のもとでの工業化と農業集団化に対応している。

物語は、工業化の推進から落伍して放浪を始めるヴォーシェフの視点から描き出される。本節で検討する馬の挿話で、大半の途上人物が労働だけで精魂尽き果てていくなかで、動物に注目するのもこのヴォーシェフである。馬が登場するのは、コズローフとサフローノフの死亡を確認しに村に来たヴォーシェフが、チークリンとともにこの村の集団化を視察する途中でのことだ。

> いくらかの距離を通り過ぎて、彼らは道で立ち止まった。というのは右側から人間の働き無しで門がひとりでに開き、そこを通って落ち着いた馬たちが出てきたからだ。(285)

この場面では、馬が道を通っているせいで人間たちが立ち止まらざるをえなくなっている。このことは、それ自体としてはごく普通の出来事に過ぎない。しかし、この部分の描写にはどこか非凡な点がある。この場面ではまず、門が開く。原文ではこのとき、開く動作を意味する動詞 открыться が「人間の働き無しで」を意味する副詞句 без труда человека によって修飾されている。この修飾語は、門が開くという現象に通常伴っている動作主としての人間が不在であることを、強く印象づけている。言い換えればここには、門を開けるのは人間であるべきだという常識が裏切られたことへの驚きが刻み込まれてい

るのだ。しかしそれは誰の感情だろうか。もっとも妥当なのは、この驚きを、この光景を目撃している「彼ら」、つまりヴォーシェフとチークリンらのものだと考えることだろう（そしてこの推測は、ヴォーシェフに関してはこの場面の終りで裏付けられることになる）。同じ文の後半で、門を開けたのが馬だということがわかる。その結果として、ひとりでに門が開いたということの不可解さは解消される。しかしそのことによって一層、そこに人間が関わっていなかったということへの驚きは、確固たるものとなっている。

この場面で現れたばかりの馬について、すでにはっきりと指摘できることがある。それは、馬たちが道路上をゆく人間たちに対して、眺められる対象にとどまってはいないということだ。というのも、まず、この馬たちは、人間たちの歩行を遮っているからだ。しかしそれだけではこの場面で進行している事態を説明するのに充分ではない。上の一節にある「落ち着いた」という形容詞がすでに示唆しているのだが、次の一節において、馬たちのこの行動が決して無自覚な行動の結果ではないことがわかる。

> 一定の足取りで、大地で育ちつつある食物に対して頭を下ろすことなく、馬たちは密集した大群となって道を通り過ぎて、水が保たれていた窪地へと降りていった。規定の分量を心ゆくまで飲むと、馬たちは水の中に入りそこで自分の清潔さのためにいくらかの時間佇んだ。その後で乾いた岸へと抜け出して、もと来た方へと動き出したが、隊列とお互いの密接さを失うことはなかった。（285―286）

いま引用された一節において、馬たちは道を使用するために出てきたのだということがわかる。そして馬たちは人間のための運搬手段ではなく、道を使う自分たちの目的を持っている。だから道路の通行者としては、彼らは人間と対等な存在として現れる。ヴォーシェフたちは、やむを得ず馬たちのために立ち止まり、そして動きが制約されている状態で、馬たちが目的を持って動いていることを知ってしまう。そして、そのまま彼らの動きを目で追い続けることにより、この場面での人間たちは、馬たちを対象として認識するだけではなく彼らの意思をも事後的に承認させられている。つまりこの突然の状況の中で人間たちは、馬たちを自らの意思を持つ存在、つまり主体としても扱うことをも強いられているのだ。そして馬たちの側でも、人間に認識されるだけの対象にとどまっていることはできず、人間たちの歩行を止めることによって彼らの生活に、一瞬とはいえ、関与している。というのも双方が、意思を持ちそれを互いに認め合った上で、行動しているからだ。ここには、人間と馬との行動における相互性がある。しかもこうした状況が、人間の意に反して起こり特定の関係性を迫るものとして、ここでは描かれている。さらに、ここでは双方について心理的な記述がほとんどなく、人間と馬が門の前という路上の一つの場所をめぐって繰り広げる身体的な運動として記述されている。それゆえにこそ、歩いてきた人間の思惟の外にありそれに先立って存在するものとして、この場面で門を開けた馬の意思が示されることが可能になったのである。さらに、そのように馬の意思が示されているからこそ、考え行動する、人間以外の主体として馬が描かれることができ、この主体と人間との、相互的な関

係が描かれることができたのである。

そのような人間と動物の関係を踏まえた上で、上記の引用箇所でさらに注目すべき点がある。それは、馬たちの行動が、極めて統制のとれたものであることだ。農村におけるこの場面は、活動家が集団化を推進しようとしながらも思うように進まず苦悩している時期にあたる。そしてこの作品の中で人間の社会は、拡張され続ける建設計画と拙速な農業集団化のせいでさらなる軋轢を経験していく。それに比べ、馬たちの落ち着いた集団行動のほうがはるかに共産主義的なのである。馬たちは水を飲み沐浴をする間、一切分派的な行動を取らない。そして集団全体としてみた場合の行動も全て目的にかなった合理的なものである。そうした合理性が、上記の引用箇所で「規定の分量」と訳出されている норма（ノルマ）という語に集約されている。というのも、この語は、計画経済下の経済活動における、生産や消費について予め決められた量を指すのに用いられる語だからだ。そのように、人間の社会で使われる語が馬の行動を記述するために使われることによって、混乱する人間たちと落ち着いた馬たちの行動の対比が仄めかされている。だから、飲み水について馬自身が決めた「規定の分量」という言い回しには、理性的な行動において馬に劣る人間という強烈な風刺が込められていると解釈することが可能である。

次の引用箇所では馬たちは散開し、食料を集める。

しかし最初の家のそばで馬たちは方々に散った。藁葺き屋根のそばに立ち止まって藁をそこから引き抜くものもいたし、貧弱な干し草が残っていたのをかがみ込んで束でくわえるものもいた。そしてもっと不機嫌な馬たちは地主の屋敷に入りそこの知っている場所からまとめて取って口にくわえて道に運び出した。（286）

馬たちは緊密な隊列を崩すが、各自が目的にかなった行動を取っているために、馬たちの統制のとれたありさまはさらに鮮烈なものとなっていく。

注目すべきなのは、馬たちの食料を得るための行動が自律的で統制のとれたものであるだけではなく、馬たちはそれを人家から調達していることである。そして、彼らが野生の植物ではなく人間によって家畜のために加工された餌としての干草にあくまでもこだわることからわかるのは、この馬たちは人間にとって手付かずの自然に属して生きてきたのではなく、人間によって利用しやすいように整えられ利用されていた自然に属して育ってきたのだということだ。つまり彼らは、人間の世話を受け、人間が用意した餌を食べて育てられてきたことがここから読み取れる。そしてそのことは、この馬たちの場面のすぐ後に続く、やや貧しい農家の夫婦についての記述から裏付けることができる。その家の主人は、家畜の馬を失い、ふさぎ込み、自分の身体が浮くという妄想にとらわれている。そして妻は夫について「馬が組織に取られてから、あの人は寝込んで何もしなくなっちゃったのよ（287）」と語っている。この箇所で農婦の言っている馬が行ってしまった先の「組織」として当てはまるものは、いま検討中の、馬の集団行動の箇所しかない。したがって、集団行動する馬のうち一頭は、その農家から逃げ出したものだと推測できるのだ[4]。

したがって馬たちについて、統制のとれた行動をとることで共産主義を実現していると指摘するだけでは不十分である。馬たちは、人間からの支配を過去に経験し、そこから解放されている故に、彼らの行動は革命的なのだ。そのことを踏まえれば、「不機嫌な馬たちは地主の屋敷に入りそこの知っている場所からまとめて取って口にくわえて道に運び出した」という一節に込められた階級闘争的な意味合いがより鮮明になるだろう。この一部の馬たちにとって、「地主の屋敷」のなかの一画が「知っている場所」であるのは、彼らが以前そこにいたからに他ならず、彼らが以前そこにいたということは彼らがそこで家畜であったからに他ならない。そして馬たちの「不機嫌」さがこの屋敷で食料を調達することへとつながるのは、そうすることで馬たちが自分をかつて支配下においていた人間たちに対して、報復ができるからに他ならない。

次の一節では馬たちは再び集合する。

どの動物も力相応の分だけの食物をとり、先程その馬たち全員が出てきた門の方向へと、大切に運んでいた。

先に来た馬たちは共同の門のそばで立ち止まり残りの全ての馬の大群を待っていた。そして全員が一緒に集まると、前方の馬が頭で門を押して開け放して馬の隊列全体は餌を持って敷地内へと去った。敷地のなかで馬は口を開け、食物はそこから落ちて真ん中に一つの堆積へとつみあがった。そしてそのとき集団化された家畜は周りに立ちゆっくりと食べ始めた。組織的に、人間の世話になることなく鎮まっていた。(286)

餌を集めるために別れたあと各自が戻ってくる時間がずれてしまうものの、馬たちは集団の中での各自の任務を忘れることがない。馬たちはお互いの行動に常に気を配って行動し、待ち合わせた上で隊列を必要に応じて組むことができる。つまり馬たちは「人間の世話になることなく」行動するための助け合いという、集団行動の利点を理解したうえで行動しているのである。

そしてこの場面では、能力に応じて働き必要に応じて取る、という共産主義の理想がほぼ実現しているとみていいだろう。食料を集めるという労働について「どの動物も力相応の分だけの食物をとり」と言及されているが、その後の食事については「規定量」についての言及は明示的にはなされていないからである。このように解釈すればこそ、次の一節にあるヴォーシェフの感情を理解しやすくなる。

ヴォーシェフは驚愕して門の隙間から動物たちを眺めていた。彼を驚かせたのは、もぐもぐやっている家畜たちの精神的な平穏である。あたかも全ての馬が、コルホーズ的な生活の意味に正確に確信を持っているかのようだった。そして彼だけが馬よりも悪く生きて苦しんでいる。(286)

この引用箇所でまず分かるのは、ヴォーシェフが、もとの場所に帰り、食事する馬たちを閉ざされた門から覗き込むという積極的な行動に打って出るほどに、馬たちの行動に衝撃を受けていることである。そして、ヴォーシェフが、馬に進路を遮られることで行動を束縛されたあと、馬が目の前を通り過ぎて

からも彼らの行動を追っていたこともわかる。というのも、門の内側で食事をする馬たちの光景は、馬たちがそれを自分たちで集めてきたことを知らないかぎり、いかなる驚愕も与えることは期待できないからだ。従って、いま引用された箇所から遡ることで、門が開いてからここまでの馬に関する記述はすべてヴォーシェフの視点からのものだったことが明らかになる。だから、ここでの彼の驚きは、馬たちが門を開けて外出してから帰宅して食事をするまでの馬の、一連の行動を踏まえたものなのだ。そして、そうやって馬たちを見守った結果としてヴォーシェフが、自分よりも馬のほうがコルホーズの意義をよく理解し実践していると考えているということは、彼が馬たちの生活に共産主義を見出しているということである。だから、ヴォーシェフの視点から主体的な馬たちによる共産主義がここで描かれている、と結論づけることが可能である。そしてまた、馬の形象を使った同時代史への風刺も、馬の食事を目撃しつつヴォーシェフが持つ感想を通して痛烈に行われているのだ。

このように、馬たちの整った集団行動には、この作品が描き出している一九二〇年代末のソ連で起こっていた、新経済政策（市場経済の導入）から第一期五カ年計画（計画経済の復活）への移行という社会的な変動への風刺がまずある。しかし同様に重要なことは、この場面での、作品に登場する動物と人間との関係である。動物界は、たとえば馬たちのように、人間が行おうとする革命を現実に自らも実践するようなものとして登場するのだ。それは、ここまで検討してきた馬たちのように、登場人物の目の前に現れ身体的な運動に制約すら与えるものとして描かれるのである。そして急いで付け加えておかねばならないのは、このような動物と人間との関係の変化を表す出来事に接するのは複数の登場人物だが、その出来事に強く触発されるのは放浪者の性格を強く持つヴォーシェフだけだということだ。そのことの裏付けとなるのは、門が開く様子を目撃し馬に歩行を遮られたのはヴォーシェフとチークリンの二人なのに、食事する馬をのぞき込んでいたのはヴォーシェフ一人でしかないということである。

『土台穴』において、馬たちが共産主義を実現しているという論点を踏まえると、最初に議論された、馬たちと人間との相互的な関係という論点をより精密に分析することができる。その際重要なのは、人間界に介入してくる動物が、干草を好み、隊列を組むことに慣れているなど、すでに人間による支配の痕跡を有しているという点である。

『土台穴』では、動物と人間とは相互に影響を与え合うような相互的な関係のなかにある。しかしそのような相互的な関係に入ってくる動物は、すでに検証されたように野生の動物ではなく、人間の支配を経験しそれを脱した動物なのだ。そしてまた、この場合に、道を遮られることで馬と相互的な関係にあることを認識することができたのは工場を解雇されて放浪者となったヴォーシェフだが、馬をもと所有していた農夫は馬に棄てられたという事態を冷静に受け止めることができていないことを忘れてはならない。

だから、ヴォーシェフと馬たちの関係について、単に人間と動物の関係をいうだけでは不正確である。ここでの、人間と動物との相互的な関係は、家畜だった経験のある馬たちと、賃労働から排除されたプロレタリアのヴォーシェフとの相互的な

関係なのである。それは、前者は農家との、そして後者は雇用者との非対称的な関係を経て、両者が出会っているということを意味する。従って、馬たちとヴォーシェフの関係は、第一に動物と人間の関係という側面を持ち、第二に社会的に抑圧されたもの同士の関係という側面を持っているといえる。そして両者の関係において、自然界の要素としての馬たちに対して鋭敏に反応するのがヴォーシェフだったという点については第一の側面が重要である。しかし、馬たちに対して彼が感情移入し彼らの感情を推し量ることができているという点については、第二の側面が決定的な役割を果たしているといわねばならない[5]。

3.『土台穴』における動物と人間のあいだの空間の持つ意義

以上の分析を、動物と人間のあいだの空間という論点からまとめなおしてみよう。ギュンテールの議論では、動物と人間の関係の変化の二要素は相補的に現れていた。つまり、一つの場合につきいずれか一方が現れるものとしてあった。ところが、いま検討した馬の挿話では、二つの要素が同時に現れていることになる。この作品における馬と放浪者の挿話では、双方がともに、動物と人間のあいだの曖昧な存在として出会うのである。そして、『土台穴』の馬と放浪者の挿話における、動物と人間のあいだの空間は、前者が人間の社会性へと限りなく近づき後者が社会からやや遊離していることによって流動化しているといえる[6]。そのなかで、共産主義の理念は双方を結びつけるものとして確固たるものであり続けている。

『土台穴』では、一方では、人間の集団のなかに富農（および中農）とその他というカテゴリーによって隔たりが生まれる。それは前者に対して死をもたらすという意味で生死を分かつものである。一方では冒頭で言及した熊の形象や、ここまで検討してきた馬の形象でもって人間と動物のあいだの隔たりが埋められている。このことは、とりわけこの作品が描き出している富農撲滅との関連において鋭い批評性を帯びている。動物と人間の境界が、馬とヴォーシェフの挿話によって揺らぐことによって、人間のあいだでの境界の設定とそれに伴う死の不条理さがこの作品で際立っているからだ。このように、プラトーノフ『土台穴』における動物と人間のあいだの空間とは、共産主義の理念を擁護しつつ、その理念にそって現実を批判的に吟味することを可能にするような場なのである。

注

1 作品からの引用は *Платонов А.П.* Счастливая Москва ; Повесть ; Рассказы ; Лирика. М., 1999. に依った。引用の際、原文のページ数を括弧内に示した。

2 吉原深和子「プラトーノフの作品における身体の変化の問題」、『ロシア文化研究』第1号（一九九四年）、八一―九六頁。

3 *Гюнтер, Ханс.* «Смешение живых существ» : человек и животное у А. Платонова // Новое литературное обозрение. 2011. №111. С. 91-105.

4ローゼンホルムは、ロシアにおいて馬は男性性と強い結びつきを持つものだと位置づけ、以下の論文でソ連期の文学作品をその論点から検証している（Arja Rosenholm, “Of Men and Horses : Animal Imagery and the Construction of Russian Masculinities” in Jane Costlow and Amy Nelson, eds, *Other Animals : Beyond the Human in Russian Culture and History* (Pittsburg: University of Pittsburg Press, 2010), pp. 178-194.）。『土台穴』の、馬を失って覇気がなくなり妻に失望される男の挿話は、ローゼンホルムの議論をよく裏付けるものでもある。

5このような、プラトーノフの作品において二つ以上の文脈が同時に意味を生み出すことを、ゾロトノーソフは「重ね合わせ наложение」と呼び、『チェヴェングール』と『土台穴』についてそのことを跡付けている（*Золотоносов, Михаил.* «Ложное Солнце»: «Чевенгур» и «Котлован» в контексте советской культуры 1920-х годов // Н.В. Корниенко и Е.Д. Шубиной (сост.) Андрей Платонов : Мир творчества.М., 1994. С. 246-283.）。

6環境に埋没するものとしての動物と、環境の中にあってそれを意味づけ世界として把握しようとするものとしての人間という対比について、ジョルジョ・アガンベン（岡田温司・多賀健太郎訳）『開かれ――人間と動物』（平凡社ライブラリー、二〇一一年）では詳述されている。本書での人間の動物性についての議論は『土台穴』で描きだされた人間たちのもつ受動性に対して示唆するところが大きい。